

岡山県倉敷市水島およびその周辺地区 の寄生虫病について

(2) 肝吸虫症

岡山大学医学部寄生虫学教室 (主任: 山口左伸教授)

水 落 理

[昭和33年8月15日受稿]

岡山県南部一帯は古くから肝吸虫の分布地として知られており、その第1中間宿主であるマメタニシは、稻尻、木村(1955)の調査によれば、水島地区周辺とくに福田地区、亀島新田、鶴新田には相当濃密に分布している。したがって、肝吸虫症は水島およびその周辺地区における寄生虫病の一特色であつて、水島協同組合病院においても肝吸虫症をとりあつかうことはかなり多い。

a) そのまんえん状況

水島地区の肝吸虫症でもつとも特徴的と思われることは、患者の大部分が朝鮮人であることである。しかも朝鮮人の青壮年男子に多い。昭和31年および32年に発見された患者計74名のうち、朝鮮人男49名、女17名、日本人男3名、女5名で朝鮮人男では検出

表1 検便による肝吸虫卵検出率

民族及 性別	検便数			肝吸虫卵陽性		
	31年	32年	計	31年	32年	計
日本人男	98	113	211	2(2.0%)	1	3(1.4%)
日本人女	134	135	269	2(1.5%)	3	5(1.9%)
朝鮮人男	97	63	160	37(38.1%)	12	49(30.6%)
朝鮮人女	65	65	130	8(12.3%)	9	17(13.1%)
計	394	376	770	49(12.4%)	25	74(9.6%)

(註: 十二指腸ゾンデ法によりはじめて検出されたものも含む)

率は30.6%におよんだ。かくのごとく肝吸虫の感染が朝鮮人にかたよつてみられる主な原因として考えられることは勿論、食生活の相違であつて朝鮮人では後述のごとく、淡水魚をサシミ、ナマスとして生食するものが多かつた。しかも一般的に密造による焼酎をよく飲用するようであるが、その際のさかなとして淡水魚をたべることが多いと思われる。

かかる点よりすれば青壮年男子が多く感染をうけていることもうなづかれる。日本人においても肝吸虫症患者には飲酒家が多かつた。ただし年少者にも勿論発見されており、6才1名、7才ないし14才8名、15才ないし20才4名の患者があつた。

地域別にみると表(2)のごとく、当然のことながら朝鮮人が多数居住する春日町、緑町、江長沖バラ

表2 地域別検出率

地域名	31年	32年	計	検出率	31及32年 検便数
春日町	10	4	14	9.3%	150
緑町	12	6	18	13.5	135
瑞穂町	2	0	2	1.3	149
連島町	0	1	1	1.1	91
江長沖バラック	17	3	20	31.3	64
弥生、寿、栄常磐、千鳥町	2	0	2	2.8	71
古新田バラック	2	2	4	23.5	17
亀島、明神町	1	7	8	40.0	20
浦田	3	1	4	21.1	19
其他	0	1	1	1.8	54
計	49	25	74	9.6	770

ック、古新田バラック、亀島町、明神町、浦田などに多く発見されている。ただし亀島町、明神町、浦田などは居住人口に比し被検査人員がすくないのでその検出率は不確実である。もつとも高いのは朝鮮人のみが居住する江長沖バラックで31.3%であつた。日本人では瑞穂町2名、春日町1名、緑町1名、弥生町1名、亀島町2名、連島町1名で、マメタニシの分布地である福田町、亀島新田、鶴新田からはいまだ検出されていない。またある地域にかたよつて多数の患者を発見することはなかつた。

しかして31年度では49名の患者が発見されているが、32年度では新しく発見されたものは25名であつて、こゝろましく発症するものも少なくしてゐるか、あるいは感染がかなり緩慢におこなわれているのではないかと考えられる。患者は淡水魚を生食してから1年ないし6年を経過しておおり、その多くはかつては生食したが最近はずつと食べていないと主張している。

b) 第2中間宿主について

患者48名についておこなつた調査では、フナを生食した経験があるものが33名でもつとも多く、コイが15名でそのうちフナとコイの両方を生食したことのあるもの13名であり、その他ハエ1名、ナマズ1名、ボラのサシミはたべたが淡水魚はたべていないと主張するもの2名、魚名不詳のものまたはたべたかどうか記憶のはつきりしないもの5名、まつたく淡水魚を生食したことがないと主張するもの4名であつた。すなわち、水島地区における肝吸虫の第2中間宿主としては、患者の言よりすれば、フナおよびコイがもつとも有力と考えられる。しかし福田町または呼松方面でとれたフナをたべたと云うものが多い。

c) 症 状

患者45名について自覚症状および他覚的所見を調査した。ただし合併症のためまぎらわしいものはのぞき、また他の寄生虫の混合感染のあるものはそれを駆虫したのちのもののみを症状とした。

もつとも多いのは腹痛であつて36例がいろいろな種類の腹痛をうつたえたと大部分は上腹または右季肋部痛である。空腹時にいたみをつよくうつたえるものもあつたが、多くは時間不定のいたみで、ときどき短時間軽いいたみを感じるものや、殆んど1日中いたみを感じてうつたえるものもかなりあつた。ある患者は3年前から摂食時や昼夜の別なく、多少増減のある上腹痛が恒常的に存すると主張し、再三の胃腸および胆嚢レ線検査によつても異常なく、十二指腸ゾンデ法により多数の肝吸虫卵を証明し、軽度の肝機能障害をみとめた。

7名において上腹または右季肋部の劇痛発作があつたが、うち5名はあきらかに胆嚢または胆道症の発作と考えられ、その2名は手術によつて確認された。

腹痛のほかには前胸部または背部に鈍痛や神経痛様疼痛を頑固にうつたえるものが相当あつたが肝吸虫

との関係はあきらかではない。

下痢は17名にみられたが、その程度は種々であつて、ときどき下痢を来す程度のものもあり、水様便が長期間とれないものもある。1日に4ないし10回便意を催すが排便はその都度はなく、時に軟便または固形便が少量づつあつたうつたえるものが8名あり、かなり特異的な症状と思われた。ただし、アンチモン剤投与によると思われる下痢は除外した。

上腹膨満感、全身倦怠、食欲不振、嘔気などもしばしばみられた。

他覚的所見としては触診により肝をふれ得なかつたものは6名で、大部分に肝の腫脹をみとめた。肝は多くは辺縁鋭利で硬度はやや硬く表面は円滑であり、大部分は圧痛がある。やや特異的と思われることは、右鎖骨中央線上よりも正中線上で著明な腫脹をみとめることが多いことで、右葉よりも左葉に変化を来す場合が多いのではないと思われる。

脾を触知したものは8名あるが、かならずしも重症者のみでなく、数ヶ月で自然に縮少して触れなくなるものもかなり観察された。しかし一般的には脾濁音界は正常のものが多く、尿ウロビリノゲン反応は重症例をのぞいて正常範囲にあり、血清黄疸指数は15例中黄疸をみとめる2例をのぞいて6ないし10の範囲にあるもの10例、正常3例であつた。軽度の白血球増多をみとめる場合がしばしばあり、これは好酸球の増加とほぼ平行するようと思われる。重症例1例において白血球数2万4千、好酸球81%をみとめたものがあり、さらに他の重症例でも白血球数1万6千、好酸球46%をしめすものがあり、後者は腹水、黄疸を来して死亡した。しかし一般的には8ないし20%の好酸球増多であり、正常はんいのものもみられた。

肝機能検査をおこなつた13名では重症3例をのぞいて、T. T. T. C. C. F. グロス反応、B. S. P. は正常はんいにあるが8例において塩化コバルト反応がR⁵ないしR⁸であつた。

1例において、約3年前より瞳孔不同および右瞳孔の対光反応遅鈍が常にみとめられた。この患者は他に神経症状、視力障害なく、梅毒反応は陰性であつた。

考 按 お よ び 小 結

水島およびその周辺地区の肝吸虫の感染は日本人では低率と思われるが、在住朝鮮人には相当高率で、特に青壮年に多い。これは食生活の相違が主因で、

第2中間宿主としてのフナ、コイを生食するためと推察される。

臨床は次の点に注目すべきであると考え、すなわち、胆嚢症や重篤な肝障害の誘因となつたと思われる例が若干あり、またさして重症とは思われない患者で、自覚症状がきわめて頑固で日常生活にかなりの支障を来している例が多かつた。一般的には右葉よりも左葉がつよく腫脹するが多いこと、軽症と思われる場合でもしばしば脾腫をみること、黄疸指数がやや高く、コハルト反応に敏感であると思われ、軽度の白血球増多をしめす例がしばしばあること、重症者において、はげしい好酸球増多をみたものがあつたこと、などは臨床所見として意義あるものと考え、

近年、食生活の改善や、衛生思想の普及によつて、肝吸虫の感染は低下しつつあると思われ、また稻岳、木村らが指摘したごとく、農業によるマメタニシの減少も感染の低下に影響あるものと思われるが、以上のごとく、しばしば重篤な場合があり、かつ生存期間も長く、駆除の困難な肝吸虫症にたいしては、たとい感染率が低下しつつあつても今後なほ相当長期間、予防上ならびに臨床上の注意が必要と思われる。

(欄筆するにあたり、御指導、御校閲をたまわつた恩師山口教授にたいし心から感謝いたします)

参 考 文 献

- 1) 稲臣成一：岡山県下吸虫類中間宿主の研究(5)、児島湾沿岸に於ける「マメタニシ」の分布について。岡山医学会雑誌、第65巻、1号(1950)
- 2) 稲臣成一、木村道也：岡山県下に於ける「マメタニシ」の分布及び犬猫の肝吸虫寄生状況。岡山医学会雑誌、第67巻、3、4号(1955)
- 3) 森下 薫：日本に於ける肝吸虫の研究。東京医事新誌、第71巻、6号(1954)
- 4) 鈴木了司、小宮義孝、熊田三由、新井一男、川島馨：群馬県館林地方の肝吸虫を主とした寄生虫の疫学的調査。寄生虫学雑誌、第6巻、第2号(1956)
- 5) 小宮義孝、鈴木了司、熊田三由、志賀満雄、小尾英一：長野県諏訪湖周辺地方における肝吸虫の感染状況。日本公衆衛生雑誌、第4巻、第3号(1957)
- 6) 平野多聞：肺吸虫寄生者の臨床的研究、第1編。新潟医学会雑誌、第72巻、第2号

On the Helminthiasis at Mizushima, the Southern Part of
Kurashiki City, Okayama Prefecture.

(2) Clonorchiasis Sinensis

By

Osamu MIZUOTI

(Department of Parasitology, Okayama University Medical School)

From an investigation into the distribution and symptomatology of *Clonorchiasis sinensis* at Mizushima, the southern part of Kurashiki City, the following results have been obtained.

- 1) The majority of cases occurred in adult Koreans, and only few cases in Japanese.
 - 2) The vectors concerned in this area are mainly *Carassius auratus* and *Cyprinus carpio*.
 - 3) Serious cases were found very often.
-